



国産接着剤のパイオニア

いまむら ぜんじろう
今村 善次郎 (1890~1971)

今村善次郎は、明治23年（1890）に射水郡掛開発村（現高岡市大坪町）の農家の次男に生まれた。

明治40年（1907）、17歳の時に単身上京。さまざまな職を転々とし、夜間学校に通って勉学に励んだ。その後、借家ではあったが「今村商店」の看板を掲げ、自身が開発した家具用ワックス、靴磨きクリームや外国製の接着剤の販売を始めた。当時、日本ではイギリスの「メンダイン」など外国製の接着剤が市場を広く支配していた。そうした状況に憤りを覚え販売を続ける中、接着剤そのものの将来性に着目した善次郎はその国産化を決意。大正8年（1919）、販売を妻 さきに任せ、その開発研究に乗り出した。

大正12年（1923）、関東大震災で壊滅的な被害を受けながらも研究を再開し、ついに待望の国産品第1号「セメダイン(A)」の製造に成功した。この「セメダイン」は結合材の「セメント」と力の単位を表す「ダイン」とによる造語で、これにはメンダイン等の外国製品を日本の市場から「攻め」(セメ)出すという強い願望が込められていた。

しかし、国民の舶来品信仰は根強く、問屋や小売店からも「国産品は売れない」と相手にされなかった。そこで、全国各地の博覧会への出品、デパートでの実演販売、新聞・雑誌に大々的な広告を出す等、宣伝活動に努めた。また、赤・黒・黄という大胆な配色のデザインでブランドを育てることで売上げは順調に伸び続け、「セメダイン」の知名度は高まっていった。そして、劣悪な類似品や模造品の出現とそれに伴うトラブルを未然に防ぐため、昭和6年（1931）に「セメダイン」と「CEMEDINE」の商標を特許局に登録した。

順調に業績を伸ばす一方で「現状維持は退歩への第一歩だ！」と自らに檄を飛ばし、何度も試行錯誤をくり返し改良を重ねた。そして昭和13年（1938）、それまでの天然物の素材に変えて、合成材料のニトロセルロースを素材とする画期的な接着剤「セメダインC」を完成させた。「なんでもよくつくセメダイン、無色透明・耐水・耐熱・速乾性良し」という誰もがすぐに理解できるキャッチフレーズで大ヒットを記録し、「接着剤」という言葉を一般化させた。

そして、さらなる普及につなげたのが、戦前・戦後の模型飛行機ブーム、また、高度経済成長期のプラモデルブームでの「セット販売」であった。子どもから大人までが遊びのなかで自然と製品を手にする状況をつくり出したことで、人々の暮らしに欠かせない必需品となっていった。

昭和31年（1956）、生産体制の整備拡大や販売網強化のため、製造会社と販売会社を合併し「セメダイン株式会社」を設立。その後も工場の拡充や業務を拡大し、昭和41年（1966）、国産自動車メーカーのアジア進出に伴う大量受注を契機に、海外市場への参入・進出を果たした。そして、同年文化の日に、多年にわたり国産接着剤の育成に寄与した功績が認められ、勲五等双光旭日章を受章した。

受章の翌年頃から体調を崩し、昭和46年（1971）80歳で他界。「終生、接着剤一筋」という信条を胸に生きた人生であった。

<専門員 番匠 健太郎>



1961年ごろのセメダインC



昭和30年代全国学童模型飛行機大会
模型飛行機ブームでの「セット販売」で
セメダインCの認知度が高まる



自宅でくつろぐ善次郎と妻のさき

写真提供：セメダイン株式会社